

# 授受補助動詞<sup>1)</sup>の対人的機能について

山本 裕子\*

## A Study of the Communicative Function of Benefactive Constructions

Hiroko YAMAMOTO

### 1. はじめに

私たちは複数の可能な表現の中から何らかの理由で一つの表現を選択し、コミュニケーションをしている。ある一つの表現はどのようにして選択されるのだろうか。

日本語教育では日本語の非母語話者による「どこかおかしい日本語」をしばしば耳にする。「おかしさ」が文法的なものでない場合、それはその状況で「日本人だったら違う言い方をする」「日本人はあまりそういう言い方をしない」というような適切さに関わることから生じる違和感であろう。一方、第二言語習得研究の興隆により、学習者がどのような表現を習得するのが困難であるかがずいぶん明らかにされてきた。第二言語習得研究では授受補助動詞の習得が難しいものの一つであることがしばしば指摘されている<sup>2)</sup>。授受補助動詞は行為に伴って恩恵のやりとりがあることを表すもので、「～テモラウ」「～テクレル」は行為に伴う恩恵の受け取りを表し、「～テヤル」は恩恵の授与を表すとされている。しかし、実際には「恩恵のやりとり」が感じられないところで授受補助動詞が用いられることも多い。

- (1) (司会者) 次は\*\*さんが発表してくださいます。
- (2) (自宅までの道順の説明をしている) 二つ目の角を右に曲がっていただいて……
- (3) A: よかったら、うちで夕飯、食べていかない？

B: え、いいの？

A: 大変だったら断ってくれていいから。

- (4) (料理番組) よく煮込んであげるとおいしくなりますよ。

これらの例では、話し手が実質的に恩恵を受けたり、与えたりしているとはいいがたい。ではこれらはどう説明すべきであろうか。また、受け取り側の表現は使うことを奨励されるのに対して、与え側の表現は「恩着せがましく聞こえるので避けるべきだ」<sup>3)</sup>等、運用上の制約があることが指摘されている。この非対称性は何に起因するのか。

本稿では授受補助動詞が実際どのような場面で用いられているかに注目し、発話の対人的機能、つまりポライトネスの観点から授受補助動詞の運用を考察したい。

---

\* 本学非常勤講師

## 2. 先行研究

本節では授受補助動詞の機能について記述している先行研究について検討する。

橋元 (2001) はリーチ (1987) の「気配りの原則」を日本語に適用し、日本語におけるコミュニケーション上のルールには授受表現の使用が関わっているとし、次の2つの原則を提案している。

(5) 恩義強調の原則：相手が施す恩恵もしくは依頼者に生じる義理を最大限言明せよ

(6) 互酬性に基づく親密さの原則：自分が施す恩恵を言明し、相手に義理感情を派生させることにより、絆の深さが確認され、関係の親密さがアピールできる。

(5) は「～テクレル」や「～テモラウ」の使用に関する原則である。「私に本を送っていただけますか」や「私に本を送ってくださいますか」のように、相手の行為を「～テクレル」や「～テモラウ」を用いて表現することにより、「相手から私に対する恩恵が施されることが明示され、同時に受益者の私に義理が発生することも含意されている (pp. 49-50)」とされている。また、(6) は「～テヤル」の使用に関する原則である。「弁当を作ってきてあげようか」のように (5) には反するが、(6) に基づいて使用されるものがあり、このように「～テヤル」は親しい間柄でしか使えないものとなっていると述べられている。確かに、(5) (6) のように、「～テクレル」や「～テモラウ」によって相手に対する義理を表し「気配り」となっている場合もあるであろうし、「～テヤル」の使用によって親しさを表わすことが可能な場合もある。同様のことは金久保 (1993) でも指摘されている。金久保 (1993) は日本語の授受補助動詞の運用上の傾向として、「～テモラウ」「～テクレル」のように自分の立場を下にして表すものが用いられる傾向が強いこと、そして「～テモラウ」や「～テクレル」と異なり、「～テヤル」は「話し手である自分のほうが立場が上であると言語として表現する (p. 66)」ものであるため、使用に制約があることを指摘している。しかし、橋元 (2001) も金久保 (1993) も、原則の使用条件が示されておらず、また具体的にどのような制約があるかについては述べられていない。よっていずれも不十分なものである。

また、城田 (1996) は授受 (補助) 動詞や「行く・来る」をまとめて話場態とし、事態に関わる人物の相対的な関係を発話時において規定するものとしている。授受補助動詞については、恩恵性の表示よりも「(事態の関与者の) 関係性の規定」という面に着目し、これらの形式が示す「内」や「外」は所与のものではなく、発話の場で相対的に決定されるものであり、「動作や状態の関係者の存在の明示 (p. 6)」であるとしている。Obana (2000) も、授受補助動詞を使用することによって話し手が事態にどのように関わるかが明示されると述べている。また日本語では話し手の占める位置を言語化する必要があると述べ、授受補助動詞はその一つの手段としている。しかし、「～テクレル」、「～テモラウ」、「～テヤル」のそれぞれの具体的な使い方について詳しく検討されているわけではなく、全体的な印象を述べるにとどまっているようである。

本稿でも城田 (1996)、Obana (2000) と同様に、授受補助動詞は事態に関わる人物の相対的な関係を発話時において規定するものであると考える。先行研究では「～テモラウ」「～テクレル」及び「～テヤル」について非常に固定的、限定的な扱いをしており、議論が十分になされていないが、本稿では、事態に関わる人物の関係がどのような場合に、どのような授受補助動詞が用いられ、それらはどんな対人的機能を果たすのかという点に踏み込んで考察をしたい。

### 3. 枠組み

#### 3-1 先行研究

本節では、本稿での分析の枠組みを提案するにあたって、現在のポライトネス理論で最も包括的なものである Brown & Levinson (1987) (以下 B & L) と、それを発展させたものであるトマス (1998)、宇佐美 (1998他) について検討する。

B & L はポライトネスを語用論的現象として扱っている。つまり、ポライトネスは調和の取れた関係を作りだしたり維持したりすると言った、さまざまな目的を達するために話し手が用いる一つのストラテジーであり、言語形式ではなく、言語の使用効果に注目するものである。B & L のポライトネス理論は、ポライトネスをフェイス<sup>4)</sup>の維持を動機付けとする対人的な配慮であり、FTA<sup>5)</sup>を回避するための言語行動として捉える。また FTA の度合いは以下の3つの要素の関数として総合的に決定されるとしている。

(7) P : 聞き手の話し手に対する力 (power)

D : 話し手と聞き手の社会的距離 (social distance)

R (x) : rank of imposition 特定の文化においてどのくらい相手に負担をかけると見なされているかの度合い

W (x) : Weight of FTA FTA の度合い

$$W(x) = P(H, S) + D(S, H) + R(X)$$

このように B & L では、複数の要素が加算的に作用すると考えられており、言語形式の丁寧度ではなく、対人的な配慮の結果として、ポライトネスを扱うことができる。

また、トマス (1998) は、B & L を踏まえ、間接的な言い回しの使用における語用論的選択を支配している要素として、(7) にあげた3点に加えて以下のものをあげている。

(8) 話し手と聞き手の間の権利と義務の相対的關係 (トマス 1998 : 135)

トマス (1998) はこれについて、言語表現の選択の基本的な原理として、言語を超えた共通性があるものと述べていることから、ポライトな言語行動のための表現選択に作用する要素と考えることができるだろう。トマス (1998) が新たに加えた (8) は「ある発話行為が相手に大きな負担をかけることになるにもかかわらず、ほとんど間接的な言い回しをすることなく行われる場面を説明するのに必要 (p. 143)」な要素である。つまり、例えば相手にとって義務であることを依頼するのと、義務ではないことを依頼するのでは、前者では間接的な言い回しをする必要は特にないのに対し、後者では間接的な言い方をする必要が生じる、ということが該当する。これは負担となる要因として、文化的に規定されたもの以外のものである、当該の事態に話し手や聞き手がどのような社会的立場で関わっているかという個別的、一回的な要因を考慮したものであり、評価できる。

宇佐美 (1998他) は B & L では一発話行為レベルの現象しか取り扱うことができないとして、談話単位でポライトネスを扱うために、B & L の理論を拡張し、ディスコースポライトネス理論として提唱している。宇佐美 (1998他) で提案されている無標のポライトネス<sup>6)</sup>やインポライトネスの扱いを含め、デフォルトとしての状態を規定し、そこからの逸脱がポライトネスの指標となっているという考え方は、B & L を補うものとして非常に有用であると思われる。本稿は授受補助動詞という特定の形式の運用に注目するものだが、それが談話全体に及ぼす影響を考察の対象とすることから、これに従って分析を行う。

これらの先行研究を検討すると、本稿の立場からは、以下の点が問題として指摘できる。ま

ず、要素の指す内容であるが、D、Pのような「人」に関する要素と、文化による相対性や権利・義務のように「コト」に関わる要素とが区別できる。これらはいずれもプライベートな場面ではなく社会的な場面における発話行為を対象としている。しかし、権利や義務だけではなく、例えば好ましい／好ましくないというような個人的な評価が動機付けとなる発話行為も考えられる。よってコトに関する要素も、人に関するも要素も、社会的なものなのか個人的（心理的）なものなのかを区別するべきであろう<sup>7)</sup>。そしてNP、PPも、先行研究では聞き手のフェイスだけに注目しているが、発話の際、話し手は自分自身のフェイスについても考慮している。よって双方向的に定義すべきだと思われる。さらに理論が対象とする範囲の問題もある。話し手と聞き手が直接関わる場合のみを考察の対象としているが、第三者について述べる場合など、聞き手が直接関わっていない場合の扱いについてはどう扱うのか。以上を踏まえて、次節で本稿での枠組みを提案する。

### 3-2 本稿での枠組み

本稿では以下の要素に注目して、分析を行う。本稿では授受補助動詞の対人的な機能、つまり表現の使用効果の分析を行う。また「ポライトネス」を、聞き手及び話し手のフェイスを維持するための言語行動として広く捉え、B & Lが扱っているFTAがある場合の聞き手に対する直接的な配慮を狭義のポライトネスと考える。

- (a) 「場」の属性：social (公) と personal (私) のどちらであるか。たとえば、呼称として、何を選択するかはこれによる。同じ人物であっても、「課長」のように役職名や、「東芝さん」のように会社名、あるいは、「お母さん」と、その「場」にどういう立場関わっているかによって決まる名称で呼ばれることもあれば、「山田さん」などの名前やあだ名など、個人に属する名称で呼ばれることもある。このように場の属性を社会的、個人的のどちらでみるかによって、その人に対する認知も異なる。
- (b) 「コト」の属性：事態に対して、話し手は「好ましい (嬉しい)」あるいは「好ましくない (嬉しくない)」のような個人的な評価と、「権利」あるいは「義務」という社会的な面からの評価をする。これのどちらが優先するかは、(a)によって異なる。
- (c) 「場」に関わる人物：話し手 (S) と聞き手 (H) が関わっている。
- (d) コトに関わる人物：(c)と区別して考えるが、もちろん(c)と重なる場合もある。ここでは授受補助動詞を検討するので、行為者 (A) と行為の (影響の) 受け手 (B) とする。
- (e) (c)と(d)に関わる要素：人物間の関係

in-group / out-group ・ 親／疎 (=D) ・ 上／下 (=P)

in-group と out-group は、話し手が話し手自身と同一に捉えているものを in-group、そうでないものを out-group と考える。家族は、家族内について問題とする場合は、自分とは異なる存在であるが、家族外の人との関係について述べる場合は、自分と同じ側として捉えられる。

親／疎は B & L の D に相当するが、本稿では社会的距離ではなく、心理的距離と考える。例えば、上司と部下では、友人同士よりも一般的には距離があるはずである。しかし、上司と部下でも、親しい場合もあれば、親しくない場合もある。親しい関係であるにもかかわらず、距離を置いた言語行動をするのは、場が改まった場合である。よって、(a)の social と personal が親疎よりも上位の概念として存在していると考えられる。また P = power (上下) は、その時に話題となっている事柄、事態によって、どちらが相対的に上位にあるか

を指すものとする。よってこれらは場面によって変わる動的なものとする。

(a)(b)(e)の総合的な関係によって、ボライトネスストラテジーの実現が異なる。また、聞き手のフェイスだけでなく、話し手のフェイスも考慮し、一つの発話行為はNP、PPも両方の面を併せ持つものとして双方向的、動的に捉える。これにより、例えばB & Lが「補償行為を行わず、あからさまに言う」としているものは、聞き手の側からはFTAでありボライトではないが、話し手の側からは、話し手の思いを直接、最も明示的な形で提示することになり、話し手のPPと考えることが可能である。このように原則的に一つの発話行為は、話し手または聞き手のNP、PPによって規定されると考える。

A、Bのいずれかが話し手でも聞き手でもない場合、すなわち第三者が関わる場合は以下のように考える。宮崎・上野（1985）では他者の心情を理解する方略として「〈見え〉先行方略」をあげている。「見え」とは話し手にとって「(何が) どのように見えるか」ということである。「〈見え〉先行方略」とは、他者の視点にたつて、その人からの「見え」を想定することによって、共感的に理解するというやり方である。宮崎・上野（1985）は意識的なものとして、これを提示している<sup>8)</sup>が、実際には鈴木（1992: 74-75）の言うように、常に意識的であるわけではなく、無意識に行われることの方が多いであろう。一般に話し手の視点を示した方が、聞き手は理解しやすく、聞き手の共感を得やすい。たとえば「行く」「来る」など、話し手の空間的な位置が語の選択に関わるものを使用することにより、聞き手は、話し手が述べている状況がどのような状況であるかを理解しやすくなる。つまり、自分が事態にどのように関わっているかを明示的に述べた方が、聞き手には理解されやすくなる。これは話し手のPFを満たすものであり、話し手にとってのPPと考えられる。これを踏まえ、以下、授受補助動詞の使われ方を分析する。

#### 4. 分析：授受補助動詞の機能<sup>9)</sup>

##### 4-1 「授受」を構成する要素と用法

まず、「授受」という事態に含まれる要素であるが、与え手と受け手があるのが基本である。

そして誰かに向けられた行為の場合、一般的にはその行為または行為者に対して何らかの評価を伴う。授受補助動詞では、肯定的な評価を表すのが基本となる。よって、与え手、受け手、事態に対する肯定的評価の3点のそろったものが、授受補助動詞の最も基本的なものとなる。要素のいずれかが欠けていたり、評価が否定的であっても、授受補助動詞が用いられることがあるが、これは派生的なものと考えられる。これらを分類すると、下の表1に示したように、6種類に区別できる。さらに3-2で挙げたように場の属性に注目すると、1～5は個人的なもの（personal）であるのに対し、社会的なもの（social）として6が区別できる。また、1～6のそれぞれにおいて、話し手が受け取り側の場合（「～テモラウ」「～テクレル」）、話し手が与え手側の場合（「～テヤル」）とがあり、それぞれ異なった対人的機能を持っている。この機能は①～⑫に区別できる。それぞれの詳細については次節以降、順に述べる。以上をまとめて表1に示す。

表1

要素場の属性		与え手	受け手	話し手の受ける影響 (コトの評価)	機能			
						話し手が 受け取り側	話し手が 与え手側	
personal	1	+	+	+(+)	対人的	恩恵表示	①恩恵受取り ②持上げ	③与え ④上位 ⑤親しさ
	2	+	+	+( )		非恩恵表示	⑥直接的 間接的	⑥直接的 間接的
	3	+	+	+(+/-)		話し手の関与		⑦受け手
	4	+	-	+(+-)	対事	事態認知		⑧対抗的意思
	5	-	+	(+-)		事態認知	⑨逆境	
social	6	+	+	-(+)	対人	立場	⑩持ち上げ ⑪丁寧	⑪丁寧
				(+・-)	対事		⑫関与	⑫関与

## 4-2 Personalなもの

### 4-2-1 聞き手の行為に関して、述べるもの(直接的評価)

#### 4-2-1-1 1. 恩恵的用法 ①～⑤

本節では、聞き手が行為者、あるいは逆に行為の影響の受け手として、直接的に事態に関わっている場合について検討する。表1の1に示したもので、授受を構成する基本要素である「与え手」「受け手」「肯定的評価」がすべて存在しているものである。話し手が受け手の場合を①、行為者の場合を③とする。そして、状況における恩恵性の程度によって、①をさらに②に、また③を④⑤に区別する。

まず、①は話し手が恩恵を感じるのとは当然であるような状況で用いられるものとする。次の例を見られたい。

(9) (自分の仕事を聞き手が手伝ったことに対して) 手伝ってくれてありがとう。

(10) この前、買ってもらったかばん、重宝してるよ。

これらの場合、たとえ実質的に役に立たなかったとしてもお礼を述べるのが常識的に見て妥当である。つまり「～テモラウ」や「～テクレル」を用いるのが当然で、逆に用いないのは、聞き手に対して配慮を欠くことになる。これは宇佐美(2002)のいう無標のポライトネスにあたるであろう。なお、「～テクレル」と「～テモラウ」の使い分けについて、ここでは先行研究に従い、「～テクレル」は恩恵を受動的に受け取ることを表し、「～テモラウ」は依頼的な受け取りを表す傾向がある<sup>10)</sup>とする。恩恵を受けているという話し手の認識が当然かどうかについては、主観的なものであり、明確な基準があるものではない。また、実際に感謝していることと言語表現が一致するというわけではない。それが表現としていかに実現されているか、つまり言語化されていれば恩恵的であると考ええる。

また「～テクレル」や「～テモラウ」を使用しないと文としては成り立たなくなったり<sup>11)</sup>、他の意味になったりしてしまう。

(9') \*手伝ってありがとう。

(10') この前買ったかばん、重宝してるよ。

これを見ると、話し手の視点で統一するために、「～テクレル」や「～テモラウ」が用いられているようである<sup>12)</sup>。このように①は意味的に不可欠なものである。

①と異なり、②はなくても適格であるが、「～テクレル」や「～テモラウ」を用いることにより、聞き手の行為を恩恵的に捉え、聞き手を持ち上げるものである。

(11) ご飯食べて行ってくれる？

(12) いいこと言ってくれるねえ。

これらの場合、「～テクレル」を用いなくてもいい。

(11') ご飯食べていく？

(12') いいこと言うねえ。

これらを比較すると、「～テクレル」によって話し手が相手の行為を肯定的に評価していることが示される。また、「～テモラウ」はそのままでは用いることができず、「～テクレル」と等価である「ご飯食べて行ってもらえる？」のように「～テモラエル」にする必要がある。これは相手が自分のためにしているとは限らない行為を「自分のため」と恩恵的に捉えるものであるために、受動的な受け取りを表す「～テクレル」、もしくはそれに相当する「～テモラエル」が用いられるのであろう。このように必ずしも必要ではないが、行為者を恩恵行為の行為者として持ち上げる働きをする「～テクレル」や「～テモラウ」を②とする。これは聞き手の PF を満たすもので、聞き手に対する PP と考えられる。

一方、話し手が行為者の場合は「～テヤル」が用いられる。「～テヤル」は話し手の側が恩恵を与えることを表すものであり、相対的に話し手が受け手である聞き手より上の立場になってしまうことから、「恩着せがましい」「威張っている」という印象を聞き手に与える可能性がある。そのため (13) のように親子や兄弟のように年齢などによる絶対的な上下の差がある間柄では無理なく自然に使えるが、一般的には用いにくい。運用上の非対称性はここから生じるものと考えられる。

(13) 子：お母さん、これできないー

母：それ？ (お母さんが) やってあげるよ。

絶対的な上下の差がない場合には、話し手と聞き手には心理的に何らかの点で「行為者側が上位」という関係がある。これを④とする。また、心理的な上下関係がない場合は、話し手は、聞き手がその行為を喜ぶということがわかるほど、聞き手と「親しい関係」にあると考えられる。これを⑤とする。このように二者間に絶対的な上下関係がない場合には、④「上下関係」にフォーカスがあるものと、⑤「親しさ」にフォーカスがあるものを考えることができる。これらは「～テヤル」に内在する性質ではなく、恩恵の授与ということから生じる語用論的な性質である。④の例として (14)、⑤の例として (15) (16) を挙げる。

(14) 三上：お、完治か。え？ なに？ おいしいフランス料理の店？

ムードがあってセンスがよくて女の子にうけそうな……ねえ。

永尾：三上なら東京はおまかせ、だろ？

三上：神宮前におススメのがある……。すぐマンパイになるけど、俺なら顔きくから予約入れといてやるよ。(『東京ラブストーリー1』柴門ふみ 講談社：84)

(15) 赤名：(工作中、いきなり) そうだっ!!

永尾：(驚いて) なんですか？

赤名：これから永尾くんのこと、カンチって呼んだげる。

永尾：(むっとして) 僕は永尾完治です (同：5)

表2

	話し手の状況	表現機能	SとHの関係	Pストラテジー	形式
①	恩恵の受け取り	+評価(当然)	S(下) < H(上)	用いないとFTAになる	「～テクレル」 「～テモラウ」
②	行為の影響を受ける	++(持ち上げ)	S(下) < H(上)	HのPP	「～テクレル」 「～テモラウ」
③	恩恵の与え	当然	S(上) > H(下) 絶対的	SのPP	「～テヤル」
④	行為者	上位にあることを表示	S(上) > H(下) 力関係	SのPP	「～テヤル」
⑤	行為者	親しき表示	S(上) > H(下) 親しさ	SのPP	「～テヤル」

(16) 北川：あらー、三上さんてモテルんだー。ね、どんなことしてるの、女のコに？

三上：この人がいなくなったら教えてあげる。

関口：三上くん！（同：）

(16) は、この人（関口）＜聞き手（北川）＜話し手（三上）のように近い関係にある、と話し手が見ていることを示している。「この人（関口）」を怒らせるための発話でもあるので、表面的な聞き手は北川だが、実際の聞き手は「この人」とも言える。これらはいずれも話し手のPFを満たすものであり、話し手自身のPPと考えられる。以上をまとめて表2に示す。

この④⑤は話し手と聞き手のFTAの度合いの見積もりの相違により、聞き手に「恩着せがましい」「威張っている」と受け取られる場合もある。これは聞き手の応答で判断できる。

(17) A：カンチって呼んだげる。

B：僕の名前は永尾完治です！

(17) ではBはAの接近に対し、「デスマス体」の完全文で答え、拒絶していることを表示している。このような衝突を回避するため、「～テヤル」ではなく、他の形式が用いられることもできる。

(18) カンチって呼んでもいい？

(19) カンチって呼ばせてもらえる？

このように、許可を求める形式にしたり、「～サセテモラウ」によって恩恵の与え手、受け手という立場を反転させ、聞き手ではなく話し手を受益者の立場のように表現し、聞き手のNFを満たそうとしている。

#### 4-2-1-2 2. 非恩恵的用法 ⑥

表1の2に示したもので、恩恵の与え手、受け手はあるが、受け手の評価がマイナス評価のものである。これには伝達の仕方として、直接的なものと間接的なものがある。直接的なものとは、次のようなものである。

(20) ぎゃふんと言わせてくれる！

(21) やめてくれー

(22) やってもらおうじゃねえか。

(23) 痛い目にあわせてやる！

これらは、話し手の聞き手に対する対抗的な気持ちを聞き手に直接伝えるものである。(20)



表 3

	話し手の状況	表現機能	S と H の関係	P ストラテジー	形式
⑥	行為の影響の受け手	一評価直接的間接的	対抗的關係	FTA を行う (話し手の PP)	「～テモラウ」 「～テクレル」
	行為者	一評価	対抗的關係	FTA を行う (話し手の PP)	「～テクレル」 「～テヤル」

～ (23) のように用いられる形式に制約がある。また、過去 (タ形) にならない、話し手自身の気持ちに限定されるといったことから、モダリティを表すもの<sup>13)</sup>として用いられている。

間接的な伝達は、本来肯定的な評価を表す形式を用いて、マイナスの評価を伝えることから「皮肉」となっている。(24) ～ (26) を見られたい。

(24) いいところで発言してくれたよね。

(25) いいことしてもらってよかったね。

(26) せっかくかわいがってあげようと思ったのに。

直接的、間接的どちらの言い方をするかは、事態の緊急性、話し手と聞き手の関係等によるが、いずれにせよ、このような非恩恵的な用法は、聞き手に対して明示的に FTA を行うものである。これは別の面から見ると話し手の気持ちを満たすものであり、話し手の PP と考えられる。以上をまとめて表 3 に示す。

#### 4-2-1-3 3. 中立的 ⑦

次に表 1 に示した 3 の「中立的」なものである。これは授受の 3 要素のうち、コトの評価がプラス、マイナスのどちらでもなく、中立的なものである。

(27) 誤解してもらおうと、困るんだけど……。

これは次のように受動態を用いてもほとんど意味は変わらない。

(28) 誤解されると困るんだけど……。

このような「～テモラウ」を山田 (2001c) は「～テモラウトコマル」の形式で用いられ、非恩恵的な用法を表すものとしている。しかし次のように後続する語をプラスの語に変えることができることから、本稿ではこの非恩恵性は「困る」によって生じるものであり、「～テモラウ」は「方向性」を表すものとする。

(29) 今日は予定があるので、早く帰ってもらおうつもりでいたんだけど……。

(30) (それは私にとっては都合が悪いことなので) 誤解してもらおうと、ありがたい。

(29) (30) が適格であることから、「～てもらおうと困る」をひとかたまりで固定的に考える必要はなく、これは話し手が事態に単に受け手として関わっていることを示すものと考えられる。つまり「～テモラウ」や「～テクレル」が行為の影響性をプラスに捉えるのではなく、単に影響の受け手側であるという行為の方向性を表すものとなっていることを示す。受動態で表しても変わらないこと、またほとんどの場合、「～テクレル」「～テモラウ」がともに使用可能であることから、恩恵的な意味よりも話し手の事態における立場を示すことに比重が高いと考えていいだろう。次も同様の例である。

(31) A1: もしよければ、ばんごはん食べていってよ。

B1: え? でも……

A2: あ、都合が悪かったら、断ってくれてもいいからね。

(31) の A2 の発話も「都合が悪かったら断ってもいいからね」と「～テクレル」を除いても可

能である。「～テクレル」を用いることによって、話し手がその事態に受け手として関わっていることが示されている。また「断ってもらってもいいからね」のように「～テモラウ」も可能である。⑦は話し手の立場を聞き手に明示的に伝えようとするものであり、話し手自身のPPと考えられる。また、授受補助動詞の本来的な用法から、対事的な方向に拡張しているものである。

#### 4-2-2 第三者の行為について述べるもの 間接的評価

話し手がどのように事態、あるいは人間関係を捉えているかを聞き手に示すものである。話し手の関わり方を示すことによって、効率的な伝達ができることから、これは話し手のPPであり、無標のポライトネスと考えられる。また対人的な機能を担うための授受補助動詞ではなく、対事的な役割を果たしていると考えられる。

##### 4-2-2-1 1. 恩恵の用法 ①～⑤

まず、①本来的な用法、つまり話し手が事態の影響を受ける側で、かつプラスの影響を受けていることを表す場合である。①は行為者への肯定的評価を伝えるものである。

(32) いなくなった犬を近所の人が探してくれてね、助かったんだ。

(33) いなくなった犬を近所の人に探してもらってね。

この場合も「～テクレル」は受動的、「～テモラウ」は依頼的という傾向がある。直接的評価の場合と同様に、「～テクレル」や「～テモラウ」を用いないと適切ではない。

聞き手の行為に対して直接的に評価をする場合には、②として聞き手を持ち上げるための「～テクレル」や「～テモラウ」があった。間接的な場合も同様である。次の例を見られたい。

(34) A：あの人、遊びに来るといつもご飯食べて行ってくれるのよ。

B：あの人、遊びに来るといつもご飯食べていくのよ。

(34) Bでは、話し手が迷惑に感じているように、受け取られる可能性もあり、それを避けるために「～テクレル」が用いられているのであろう。直接的な評価では、聞き手を持ち上げる場合には、聞き手に何らかの申し出をしているなど、FTAの度合いが高い発話行為をしているという状況でみられる。しかし、第三者の行為の場合には、直接行為者に向けた発話ではないので、FTAの度合いは低くなる。よって、(13)のように立場を反転させたりして行為者を持ち上げるものは見られない。

次に第三者に対して用いられる「～テヤル」を見てみよう。まず、③本来的なもの、つまり絶対的な上下差のある関係で用いられる「～テヤル」である。

(35) お兄ちゃん、これ、(弟に)やってあげて。

(35) では、兄が弟ができないことを代わりにやるように母に言われている。この場合、当該の行為は弟には年齢的に不可能であり、絶対的な能力差がある。このような場合「～テヤル」は無理なく用いられるが、そうでない場合、直接的な評価の場合、行為者と被行為者には④「上下関係」、あるいは⑤「親しい」気持ちがある。

(36) 話し手は教師。同僚の教師と話している。

(できない子を)残して私が見てあげたので、ずいぶんできるようになったんですよ。

(36) では、教師と生徒という上下のある関係でのやり取りに「～テヤル」が用いられている。話し手には自分の行為が恩恵的であるという自覚があると思われるが、上下関係にある相手に対して用いられており、また聞き手も話し手と同様の立場であるので、それほど問題とならない。

(37) 日本代表をワールドカップに行かせてあげたい。

ここで、話し手は事態の実現には全く影響力はない。よって(38)の「～テヤル」は話し手の「日本代表チーム」に対する思い入れの表れだと考えられる。

#### 4-2-2-2 2. 非恩恵的用法 ⑥

次に⑥非恩恵的な用法を見る。これは話し手が第三者によって「迷惑」を受けていることを示すものである。次の例を見られたい。

(38) あの人、いつもいいところで口をだしてくれるんだよね

(38) のように、第三者の行為に対して話し手が迷惑に思っていることを表す。行為者が第三者の場合には、聞き手の場合とは異なり直接的に述べることは不可能であるので、間接的に述べるしかない。

#### 4-2-2-3 3. 中立的 ⑦

次に受け手、与え手は存在しているが、コトの影響が中立的なものである。

(39) A：彼に誤解してもらうととても困るんだけど。

(39) は「彼に誤解されると」のように受動態を用いてもほぼ等価である。また、次のように後続する文はプラスの内容でもかまわない。

(40) 彼に誤解してもらうと都合がいい。

(40) も「彼に誤解されると」のように受動態に変えることができる。よって、この「～テモラウ」は単に彼が受け手であることを表すもので、プラス評価もマイナス評価も表さないと考えられる。これは事態に話し手がどのように関わるかを表すという対事的な認識を示すものである。

#### 4-2-2-4 4・5. 方向性（対事的認識）⑧⑨

最後に受け手あるいは与え手が欠けているものである。これは、話し手が事態に対してどのような立場に関わっているかを表し、話し手の対事的な認識を示すものと言える。受け手として関わっている場合は「～テクレル」が、向かっていく立場であるときは「～テヤル」が用いられる。

(41) 一発当ててやる！

(42) 一発当ててくれる！

(42) のように「～テクレル」が用いられる場合もある。また、話し手が受動的に関わっている場合には、次のように「～テクレル」が用いられる。これは事態に話し手が感情的に巻き込まれていることを表すものである。

(43) (仕事がとても忙しいことに對して) あー、もう勘弁してくれよー。

(44) いろんなことを一度に言われて、もうやめてくれーって感じで……

いずれも話し手は困った事態にあるが、誰か特定の人がそれを引き起こしたわけではない。話し手の力ではどうしようもない現実や状況に対して、不満を述べるような場合に用いられる。まとめて表4に示す。

以上、第三者の行為について、話し手がどのように捉えているかを聞き手に伝えるものを見

表4

	話し手の状況	表現機能	Pストラテジー	形式
⑧	事態に関わろうとする	向かっていく決意の表明	SのPP	「～テヤル」 ('～テクレル')
⑨	影響を受ける	受動的なSの状態を表現	SのPP	「～テクレル」

た。授受補助動詞を用いることによって、話し手が事態にどう関わっているかが言語的に示される。つまり話し手自身が話し手の立場をどう捉えているかが示され、聞き手に理解されやすくなるので、これは話し手の PP である。

#### 4-3 social なもの

本節では social なものをみる。話し手は社会的な関係で規定される立場に関わっている。social な場面で見られる用法は大きく次の3種類に区別できる。

表5

	用法	機能	形式
話し手の「場」における立場の表示	⑩in / out	行為者を上に待遇	「～テモラウ」「～テクレル」
	⑪丁寧さ	聞き手に対する丁寧	「～テモラウ」「～テクレル」「～テヤル」
	⑫関与(一般論)	話し手の「見え」の伝達(対事的)	「～テモラウ」「～テクレル」「～テヤル」

表5に示したように、social なものは、⑩⑪⑫の3つに区別できる。⑩は授受補助動詞の本来の性質、恩恵性を保持したもので、⑪、⑫と順に恩恵性が薄くなっている。ここでの恩恵性は個人的な関係というよりも、場の性質により生じるものである。

⑩は場での話し手の立場によって、聞き手と in-group とみるか、out-group とみるかが異なり、それによって話し手は行為者側、あるいは受け手側のどちらの立場で事態に関わっているかが決定する。そしてそれは授受補助動詞によって明示される。

(45) (司会者が発表者を紹介して) では次は\* \*さんが発表してくださいます。

(46) (助手が大学院生に指示をする) 今日中に係を決めていただければ結構ですから。

(47) 当社は\* \*を販売させていただいております。

これらはいずれも「場」において、話し手は「司会者」「指示を出す立場」など、何らかの社会的に規定される立場にたち、それに従った「役割」を担っている。その役割に基づいて「受け手側」「与え手側」が区別され、話し手と聞き手が別の立場であることを明示するものとなっている。

ここでは「立場」によって、恩恵を受けたり、与えたりしていると考えられる。もし聞き手との関係に配慮せず、聞き手を持ち上げることを特に意識しなければ次のような表現になるだろう。

(48) では、次は\* \*さんが発表します。

(49) 今日中に係を決めなければなりません。

(50) 当社は\* \*を販売しております。

また、⑪も、話し手と聞き手は社会的に規定される関係、例えば、(51) (52) のように、接客業の店員と客のような関係にあるときに用いられることが多い。

(51) (フロント係が宿泊客に道案内をして) 次の角を右に曲がっていただいて……

(52) (インストラクターがエクササイズの説明をしながら) 足の裏側もよく伸ばしてあげてください。

フロント係は客が道を曲がることで恩恵を受けるわけではない。またインストラクターも、エクササイズをする人も足に恩恵を与えるわけではない。よってこの場合、「～テモラウ」や「～テヤル」は意味上は必要なものではない。発話者と聞き手の関係をみると、発話者がお客さ

人など、話し手にとって待遇的な配慮が必要な相手である。またこの用法では(52)のように敬語形が用いられたり、また「～テヤル」ではなく、「～テアゲル」が用いられることから、「丁寧に」待遇しているという話し手の意識の表れと考えられる。

⑫は⑩⑪のように聞き手に対する直接的な配慮ではなく、話し手の事態の認識を示すものである。どのような事態が望ましいか、という話し手の認識を示すもので、話し手の関わる立場によって、形式が選択される。影響を受ける側であれば「～テモラウ」「～テクレル」、行為者側であれば「～テヤル」が用いられる。

(53) 景気が悪くなると、すぐ公共事業。そんな場当たりの政策をしてもらっては困る。

(54) (家は)風通しをよくしてあげると、長持ちしますね。

(53)では話し手は政府の政策を批判している。話し手は施策する側ではなく、受動的な立場である。逆に(54)では建築家など専門的な立場で、事態に関わっている。聞き手より事態に関する知識においては上の立場であることも「～テヤル」の性質に一致する。⑫では話し手の関わる立場も含めて一般論が述べられている。⑪と⑫は聞き手への直接的な働きかけの有無によって区別される。よって聞き手が助言を求めた場合であれば(53)(54)は⑪とも考えられる。

#### 4-4 まとめ

3-2で提案した枠組みに基づいて、授受補助動詞の運用を分析した。本稿では、まず、場の属性が「個人的」か、「社会的」かによって、授受補助動詞を用いる動機づけが異なることに注目し、特徴づけを行った。いずれの場合も授受補助動詞は恩恵の受け取り、与えを表すという「恩恵性の表示」を本来とし、それを利用して、対人関係を調節しようとするものと、話し手の事態認知を効率的にしようとするものに区別できる。対人関係を調節しようとするものにはポライトネスが積極的に関与しているが、後者には消極的に関与している。事態との関わりやの程度、聞き手への働きかけの内容、程度によってFTAの度合いも異なり、ポライトネス戦略としての実現も異なる。また、ポライトネス戦略の実現(話し手のNP・PP、聞き手のNP・PP)は同列に扱うのではなく、優先順位が考えられる。そうすることによってフェイス侵害の見積もりの度合いが衝突する場合に、複数の表現の可能性から当該の表現を選択する理由を説明することができる。今後の課題としたい。

また意味的な拡張においては、対事的な拡張と対人的な拡張がある。授受を構成する要素から与え手または受け手が欠けている場合は対事的に、聞き手と直接関わる時は対人的に機能するように拡張している。授受補助動詞は一般的にはモダリティを表す形式ではないとされるが、時にモダリティ的な性質を帯びており、一文レベルではなく、文脈の中でどのように使われているか、話し手、聞き手の事態への関わり方を検討する必要があることがわかった。

#### 5. おわりに

本稿ではポライトネスを聞き手だけでなく話し手のフェイスも維持するための双方向的、相対的な言語行動と広く捉え、従来のように一文レベルで静態的ではなく、より大きな単位で分析をした。今後はさらに枠組みを精緻化し、補助動詞形式をはじめ、他の形式についても対人的機能の分析をしたい。

## 引用文献

- 宇佐美まゆみ (1998) 「ポライトネス理論の展開：ディスコースポライトネスという捉え方」『日本研究・教育年報』東京外国語大学日本課程編、pp. 147-161.
- (2002) 「ポライトネス理論の展開 第9回」『言語』31巻9号、大修館書店、pp. 98-103.
- 金久保紀子 (1993) 「待遇表現としての授受表現」『日本文化研究』4、筑波大学、pp. 15-26.
- 城田俊 (1996) 「話場応接態 (いわゆる「やり・もらい」) ——『外』主語と『内』主語——」『国語学』186号、国語学会、pp. 1-14.
- 鈴木情一 (1992) 「視点の心理」『日本語学』明治書院、pp. 72-89.
- 田中真理 (2001) 「ディスコースと日本語教育」平澤洋一編『認知文論』おうふう、pp. 183-229.
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語の文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 橋元良明 (2001) 「授受表現の語用論」『言語』30巻5号、大修館書店、pp. 46-51.
- 堀口純子 (1987) 「『～テクレル』と『～テモラウ』の互換性とムードの意味」『日本語学』第6巻4号、明治書院、pp. 59-72.
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 水谷信子 (1985) 『日英比較話ことばの文法』くろしお出版
- 宮崎清孝・上野直樹 (1985) 『視点』東京大学出版会
- 山田敏弘 (2000) 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第1回」『日本語学』第19巻11号、明治書院、pp. 94-103.
- (2001a) 「同 第6回」『日本語学』第20巻4号、明治書院、pp. 90-101.
- (2001b) 「同 第7回」『日本語学』第20巻5号、明治書院、pp. 102-112.
- (2001c) 「同 第10回」『日本語学』8月号、明治書院、pp. 92-114.
- 山本裕子 (2002a) 「『～テクレル』の機能について——対人調節的な機能に注目して——」『言葉と文化』第4号、名古屋大学国際言語文化研究科日本語文化専攻、pp. 127-144.
- (2002b) 「『～テモラウ』の機能について——『～テクレル』と対比して——」『紀要 (人文・社会編)』第48号、名古屋女子大学、pp. 263-276.
- (印刷中) 「『～テヤル』の対人的な機能についての一考察」『世界の日本語教育』第13号、国際交流基金日本語国際センター
- トマス・J (1998) 『語用論入門——話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味——』研究社出版
- リーチ・G (1987) 『語用論』池上嘉彦・河上誓作訳、紀伊国屋書店
- Brown.P & Levinson.S (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press.
- Obana Yasuko (2000) *Understanding Japanese*, Kuroshio Publishers.
- Usami M (2002) *Discourse Politeness in Japanese*.

## 注

- 1) 授受補助動詞とは「～テクレル」「～テヤル」「～テモラウ」の3系列とそれぞれの待遇形を含む、7つの語の総称を言う。また本稿では「～テクレル」のようにカタカナで表記する場合、それぞれの活用形、待遇形も含めたものとする。すなわち、「～テクレル」は「～てくれる」「～くださる」の活用形、「～テモラウ」は「～てもらう」「～ていただく」の活用形、「～テヤル」は「～てあげる」「～てやる」「～てさしあげる」の活用形をそれぞれ含むものとする。
- 2) 水谷 (1985)、田中 (2001) 等、参照
- 3) 例えば益岡・田窪 (1989: 77) 参照
- 4) フェイスは人間の基本的な欲求の一つで、「他者に理解されたい、好かれたい」というポジティブフェイス (以下 PF) と「賞賛されないまでも少なくとも他者に邪魔されたり、立ち入れたくない」というネガティブフェイス (以下 NF) があるとされている。
- 5) FTA: Face Threatening Act 相手のフェイスを脅かす可能性のある行為
- 6) 無標ポライトネスとは「『守られていて当たり前、失礼のない状態』としての『談話』の総体を、『無標ポライトネス』と捉える。(宇佐美2002: 99)」である。ここでは「談話の総体」として基本レベルを保つことができるような発話行為を発話行為のレベルで無標ポライトネスと考える。

- 7) P や D の指す内容が明確ではないことは多くの研究者に指摘されている。
- 8) 宮崎・上野 (1985) が文学作品の鑑賞においての心情理解を論じていることも、「見え先行方略」を意識的なものとしていることに関係があると思われる。
- 9) ここでの分析は山本 (2002a) (2002b) (投稿中) がもとになっている。
- 10) 「～テモラウ」と「～テクレル」の使い分けについては堀口 (1987) 山田 (2001b) 等参照。
- 11) 直接構造 (山田2000参照) では「～テクレル」や「～テモラウ」を用いないと不適格となる。
- 12) 田中 (2001) 参照。
- 13) 仁田 (1989) 山田 (2001a) 参照。